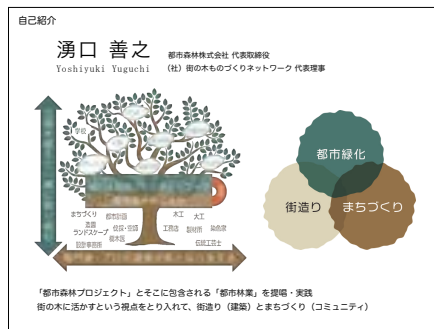


都市の資源としての樹木のリデザイン



簡単な自己紹介 兼 取組み概要の紹介



私たちが暮らす街には、たくさんの木があります

私たちが暮らす街には、たくさんの木があります。驚くほど多種多様な樹種がありますし、山でもそう見かけないような大木も珍しくはありません。



なぜ、街の木は伐られてしまうのか？

私はこれまで、たくさんの木の最後に立ち会い、なぜこんな大木が伐られてしまうのか、なぜこれほどの緑地が更地にされなければならないのか、なぜこの木の持ち主や関係者は伐採を決断するに至ったのか、たくさんの現場で当事者から話を聴き、そこで伐採された木々を木材化してものづくりをするプロセスを通じて、普段は見えない持ち主の思いと、木の内側を見てきました。



街の木のほとんどはなんらかの傷みを抱えていて、大きな幹がいつ折れてもおかしくないという木も多くありました。



増えた緑地、育てて大きくなった木々の管理費用は増大し、予算を圧迫しています。放っておけばどんどん大きくなって、手入れの負担や事故のリスクも増えていく。長年大木を維持してきた人のなかには、管理に疲れて伐採を決断する人も出ています。



緑が増える場面ではなく、緑が減る場面こそ、偽らざる街の木の実情が見えてきます。現状の街の木には、植えれば植えるほど、大きく育てれば育てるほど、持ち主の負担やリスクが増す「負債」のような性格があることを認めなければなりません。



育てた甲斐がない、残念、寂しい、喪失感



立派な木や緑地の節目に生じるのは街の分断
木が立派であればあるほど、緑地が素敵であれば素敵であるほど、起こりやすい



こんなことになるのであれば、木なんて植えなければよかった、、
できるだけ大きな木は植えたいようにしよう、最小限にしておこう

街の木のあり方がもしいまのままならば、いくら木を植えても、皆が「木は大事!」「緑でいっぱいの街に住みたい!」と思っても、実際に維持できる量は限られてしまうでしょう。

街の木を負債から資産へ



緑は大切!と皆が言う一方で、木の名前すら知らないことが多いのも実情

緑は大切!という一方で、木の名前すら知らないことが多いのも実情です。身近な木々がどんな性質か、花はどんなか、実はどんなか、何に使えるのかなんてまして知りません。(樹木の伐採反対運動の現場で行った取組: 樹木カルテづくりイベント、を紹介)



街の木の恵みを食に活かす収穫祭

伐った木はゴミ同然だし、公園の木の実は腐らせるのが当たり前といった、いまそ
うであるように木に触れられる機会が少ないままならば、街の木は「負債」である
ことを免れないでしょう。お花見でも果実の収穫でも虫採りでもなんでもいい、木
をきっかけに人が集まり、楽しめるようにすることです。木がくれる恵みを活かし
てみることです。触れて親しみ、楽しさを発見できてこそ、街の木の「資産」とし
てのありようが見えてきます。



街で育てた木々を、木材として活かす

普段から木がある暮らしを楽しむ一方で、伐採された木々は木材にして、暮らしの
道具や家具を作ります。造っては壊しての繰り返しで、継続しない街並みの中に、
人々の想いが詰まった木々を集めて街の人にとって大切な空間をつくれます。



街の木活用の難しさは山の広葉樹活用の難しさと実は同じ



住民参加のプロセスで



定番イベント：製材ワークショップ
街で育てた木を伐採したら、その木を街通りに活かす作業と一緒に取り組む



みんなで製材した木材が街の施設に活かされる



街の木60樹種使用、ここに来れば、街で見かけるほとんどの木がある
色んな思い出の木々も集合している



木材になる（伐採する）木々からは種を採ったり、苗木を育てたりして木の命を継承し、都市森林を育みます。



先達が植えてくれた木々で街を造り、自分や子供たちが植える木で、街をつくっていくのです。



世代を超えて受け継がれる街の木でできた街並と、木をきっかけに人が出会い、楽しみ、学び、汗を流し、なにかに取組む光景が当たり前にある街をつくりたいのです。